

平成 24 年度

事業所名 : グループホーム 水沢コスモス

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370400178		
法人名	社会福祉法人全人会		
事業所名	グループホーム水沢コスモス		
所在地	〒 023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字十日市85		
自己評価作成日	平成 25 年 4 月 18 日	評価結果市町村受理日	平成25年6月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2011_022_kani=true&JigyosyoCd=0370400178-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成25年4月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員の学習意欲が高まり、今年も介護福祉士取得者が出た。職員の職場定着も安定し、国家資格に裏付けられた熟練の職員が常に利用者の側にいることができる環境は、グループホーム(以下GH)として私たちが目指す理想により近くなったと自負できる。演題発表の機会を持つことも、職員の資質向上につながっている。当コスモスは男性利用者が多く、高齢男性の平均余命が伸びている現在、高齢者施設運営のモデルの一つとなるのではないかと。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者は認知症介護に関する高い知見と強い信念を持っていることが伺われ、職員も目的意識を持ち、国家資格取得への意欲も高い。医師である運営者が「全人的医療」の考え方を介護サービスにも適用し、利用者が本人本位にゆったりと生活できるように支援することを基本にしている。9人中8人が男性利用者であり、遊戯、合唱等の余暇、レクリエーションなどの活動は少なめにし、自分の好きなことをして、落ち着いた暮らしが続くよう支援している。男性同志互いの絆が感じられ、夫々定まった居場所でゆったりとした表情で過ごしている。今後とも認知症介護に対する理論的裏付けのもと実践場面で的確なケアが期待できる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会]

事業所名 : グループホーム 水沢コスモス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々の話し合い、毎月の合同会議、年4回のパーティ、運営推進会議等で確認し合っている。特に職員採用面接に現任職員が立会うことで理解を深めている。	運営主体の社会福祉法人が定めた基本理念を事業所の運営理念としており、「全人的」をキーワードに介護サービスの提供に努めている。実践場面では「自分がされて嫌なことはしない」「自分がして欲しいと思うことをする」ことを基本に理念を具現化している。	職員採用面接に現場の職員が加わり、キャリアや理念に照らした考え方の確認を行うなど、採用後の理念の共有やチームワーク確立に役立っており、今後も継続実施に期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会への参加、地元振興会の会員になる、佐倉河地区文化祭への出品など、佐倉河地域の一員として参画し、交流している。さくらの湯は散歩コースである。	散歩を通じて近隣の方々との交流が深まっている。運営推進会議メンバーの地区区長や民生委員の働きかけを通じて、地域の方々が法人主催の夏祭り等の行事に参加する機会が増えてきている。敬老の日には地区の保育園児が来訪、楽しく交流している。	事業所が有する認知症に関する専門知識や制度利用等について、高齢者を始め地域の方々に積極的に伝えるなど、地域の方々との双方向の交流が一層期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当会の在宅介護支援センター職員が、年4回のパーティーや運営推進会議に協力し、民生委員の参加を得ている。認知症を具体的に理解できる機会となっている。保育園児を対象に遊びを通じて触れあいの機会を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎月の合同会議を運営推進会議に広げ、第三者委員や民生委員、包括支援センター職員の参加により、実践状況を見ていただき、ご意見を頂いている。パーティを運営推進会議に合わせているので、ご家族の真摯なご意見を頂戴できる。	運営推進会議は、隣接のグループホームと合同で年4回程度開催し、毎回利用者の家族にも案内をしている。会議終了後、推進委員、利用者、家族、職員の交流パーティを開き、相互の意見や情報の交換を行い、施設への理解に繋がっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	管理者と計画作成担当者は、介護認定審査会委員である。当会の在宅介護支援センター活動を通じて市町村との情報交換も密である。運営推進会議には包括支援センター職員の参加がある。介護保険認定更新時は市町村職員が訪問調査するので、介護の実際を見させていただく良い機会となっている。	市職員とは介護認定調査時や、生活保護受給関係等を通じてやり取りしたり、在宅介護支援センター会議等で情報交換したり、関係担当職員と連絡を密にしながら対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	当会で最も忌み嫌う身体拘束は、向精神薬の服用である。次に、認知症治療薬の無期限投与である。特にご家族が認知症治療薬に依存しきっている現状を変えにくいことに苦慮している。玄関の施錠は、外での危険＝交通事故、用水路での水死、凍死などとの兼ね合いがある。	身体拘束廃止に関する学習を行う等職員間の共通の認識を持つようにしている。特に眠剤や抗不安剤の向精神薬の服用は身体拘束に繋がるとの認識のもと、治療薬の服用に留意しながら行動の安定を図るよう支援している。	近くに大きな川、用水路があり、また交通量が多いことなどから日中、玄関施錠されているが、本人本位の暮らしを基本とする当事業所として、また先駆的な取り組みをしている事業所として他の回避工夫等に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待には、様々な形態がある。暴行や放置などに目が行きがちだが、わいせつ行為や財産詐取なども虐待である。特に家族によって金品を詐取されている場合は、分かっている手の出しようが無いのが現実である。管理者は常に様々な事例を示し、注意喚起に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は昨年、成年後見人の有資格者であるが、現在までご家族からの相談は無いものの、権利擁護事業を始めたいご家族への助言はしており制度の実行支援はしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書で説明し、さらに重要事項説明書で理解を深めてもらっている。入居時調査票への記入もご家族にお願いし、想いの共有化を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書で充分説明している。毎月のお会計時、運営推進会議、パーティなど様々な場面で、意見要望を聞く機会を設けている。しかし、それらの場に一切現れず、唐突に他事業所に不平不満をばら撒くご家族もいる。	全家族に運営推進会議やその後の交流パーティの案内を行い、忌憚のない意見交換を行うよう努めている。また、家族と話し合う機会を設けるため、会計は口座振り込みとせず、毎月出向いていただき、その際に様々な話を伺う機会としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日のミーティング、毎月の会議、復命書、企画書、決裁書などで多くの意見や提案を聞く機会を設けている。ピラミッド型の組織にせず、横並び型でどの職員にも発言の機会を設定している。当会独自のドキットと報告書により職員意見を発信する仕組みがある。	管理者は基本的にミーティングには加わらず、職員間で緊密に連絡、報告等を行っており、積極的な意見交換の結果が管理者に上がってくる。職員・家族が病休等になった場合の臨機な対応のため、勤務時間の変更やパートの採用など勤務体制に関する具体的な提案があり、運営に反映されている。	苦情・不満、事故への対応は「24時間以内の解決」を実行しているとのことであるが、これは非常に大切なことであり今後も継続してもらいたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	複数回の人事考課により、客観的に自分を評価する機会を設け、職場意欲の向上に努めている。就学、公的資格取得、介護認定審査員への協力など、法人として支援を惜しまない環境がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	様々な演題発表参加は、長期の計画に基づき、理事長、管理者、リーダーを交えての検討を重ねた結果の成果である。演題発表は、総合的な研修の場として、当会でもっとも重要な位置を占めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	家族介護者教室、パーティ、夏祭りなどには必ず情報を発信し、同業者の参加を呼びかけ、交流の機会作りを積極的に行っている。法人のホームページにも、最新情報を掲載している。見学も正式な申し込みには応じており、交流の機会を作る仕組みがある。鳥取県や兵庫県の同業者との交流が続いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最近では病院退院と同時開始の方やヒルズココ利用からの転居もあり、ご自宅訪問は無くなった。複数の情報を得、ご本人との接触の機会を多くすることで、信頼関係の構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	当会の通所介護利用からの移行入所が多いので、初期の信頼関係は既に構築されている実感がある。しかし、主介護者が誰かによって、信頼関係がなかなか築けない場合もある。(主介護者が妻の場合は思いの共有が難しい)		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用申し込みを頂いた際には、担当介護支援専門員や包括支援センター等への問い合わせを必ず行い、他の社会資源活用を探っている。安易にグループホーム利用でその場を切り抜けるのではなく、長期支援を視野に入れ、最適な支援方策を話し合っている。担当介護支援専門員が、2～3か月使ってみたらなどと無責任な提案をし迷惑することがあった。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	『そうですね、いいですね』と利用者の全てを肯定することだけでなく、時には職員が利用者へ反抗したり、利用者同士が小競り合いをしたり、誰かがとりなしたりという様々な精神活動があつてこそ、共に暮らす意義がある。そういう職員教育をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	年4回のパーティ、家族介護者教室、家族参観日、などを通して認知症介護は家族とともに築いていくものであること、私たち介護者側には家族の支えが必要であることを伝えている。管理者はこれまでの家族との関わりも含めて『死なせかたのコツ』について発表を続けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用開始に際し、ご家族に入居時調査票を記入していただき、その方固有の過去歴を大切にしている。利用期間が長期化するに伴い、記憶から消えたり身体的にその場に行けなくなるなど当初には予想できなかったことが出現している。	馴染みの理・美容院はじめ、友人知人等の関係性は年々薄れてきている事実はあるが、施設内での新たな人間関係づくりや家族との関係性の調整で馴染みの関係を継続したいと努力している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	親密な関係だけが関わり合いではない。陰湿な感情の表出も重要な精神活動であることを職員が理解し、利用者同士の絆を深め合えるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者のリロケーションダメージを最小にできるよう綿密な計画をたてて支援してきた。姥捨て支援ではなく、本人ご家族ともども関係を断ち切らない支援を目指している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。しかし、主介護者がどなたなのかによって、思いが変わり支援に苦慮することがある。	利用者本位に立って、本人の思いや意向の把握に努めているが、家族の思いや希望と齟齬が生ずる場合があるとしている。「本人が望んでいること」について、家族の中でも思いが異なることもあることから、家族の方々とよく話し合い、理解を得ながら支援を続けている。	特に、利用者の妻の場合は、夫への思いが特段に強いことが多いことから、労いの言葉と丁寧な説明に心がけているとのこと。今後も継続願いたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。全ての当会サービスは、その方の過去歴の共有から始まる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月の定例会議で、お一人お一人の心身の状況を報告し合い、職員から意見を出し合って検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の定例会議で、お一人お一人の心身の状況を報告し合い、職員から意見を出し合って検討している。毎月のご家族との面談等で情報の交換を行っている。	毎月、介護記録を全職員で検討し、短期、中期の計画の妥当性、変更の必要性の有無などを確認しながら、家族とも話し合い、現状に合ったケアが出来るよう計画の作成、見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の行動、言葉、そのことについての職員の関わり、結果をそれぞれ時系列で記入できる個別の支援記録を作成し活用している。これは、当会のオリジナル書式である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日のミーティングを毎月の会議に反映させ、検討し、常に一人ひとりにあった柔軟なサービスを提供している。現行介護保険での、グループホームサービスは限定的である。サービスの多機能化とはどういうこと指すのであろうか？		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用開始の際にご家族から頂いた、入居時調査票を基本情報として、個別の暮らしを支える仕組みを作っている。田んぼを見たり、白鳥を見に行ったり、当会グループホームは地域資源なくては暮らせない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居に際し、かかりつけ医を変えてもらったことは無い。緊急時には、連携医療機関である奥州病院の協力をいただいている。受診時には、事業所から医療機関に文書で情報を出し、より適切な診療を受けられるよう支援している。	家族が同行することを基本としているが、緊急時や家族に都合がある時は職員が対応している。かかりつけ医には、予め利用者の生活状況などを伝えるようにしている。月1回訪問看護ステーションによる訪問看護をお願いしており、健康管理の支援や医療的助言を得ているが、不整脈の発見につながった例もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常的には、当会の看護師が関わっている。その他に、訪問看護ステーションと契約している。折々に気づいたことを、医療機関受診時に反映する仕組みがある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関受診時には、当会から直近の健康状態情報を出している。本人は自分の状態を伝えることができず、ご家族も本人状態を把握していない。当会からの文書による情報が認知症高齢者の診療時には不可欠である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	いきなり重度化するわけではないが、ご家族にはその過程が把握しかねるようだ。段階ごとの説明と、ご家族意向の把握を常に行い、時系列に記録し、職員ご家族ともに最新の状態を共有するよう努めている。その結果、本人、家族ともども安らかな最後を迎えられた複数例を経験したので『死なせかたのコツ』として発表した。	重度化への事業所の対応は、経口による食事が出来なくなった段階までとし、終末期への対応は、その時点で家族と相談しながら、最も良い方法を助言することとし、基本的に「生活支援の場であるホームで看取りはしない」ことで家族に説明している。	今後在宅での看取りのケースが増え、在宅医療、在宅看護体制の充実と相まって、介護施設等での看取りも現実の課題になってくることが想定される。終末期への対応について、これまで以上に話し合いの機会を多く持つことが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	体温計、血圧計、パルスオキシメーター等を常備し、急変時のデータ採取、その後の連絡手順等トレーニングしている。グループホームでは、応急手当よりも専門スタッフへの正確かつ迅速な引渡しが大切である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の区長さんが中心となり、災害時には当会への支援を優先的にしようという動きになった。運営推進会議からの派生効果である。	敷地内の法人全施設合同で火災を中心とした防災訓練を年2回実施している。今後、運営推進会議メンバーの地区長さんに参加してもらおうこととしており、区長さんを通じて近隣の理解と参加に繋げたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居前調査票によって、お一人おひとりが、何に傷つくのか、何を誇りとしているのかなどを把握するよう努め、入居後も検討を重ね、情報を職員皆で共有している。	職歴によってはプライドの高い利用者もあり、職員間でその人の特技、趣味、ご自慢なことなどを共有し、折に触れ本人から引き出し、尊厳を持って生活が出来るよう支援している。また、プライバシーを尊重しながらの居室の出入り、排泄時のさり気ない言葉かけによる支援など、本人の尊厳を傷つけないよう配慮しながらケアにあたっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人決定を尊重することを第一にしているが、認知症のため辻褃が合わないことが多くある。そのため、ご家族との行き違いが発生し、事後処理に苦慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ドキッと報告書の検証によって、支援が職員都合が優先されたか否かが分かる仕組みを作っている。さらに1か月をまとめ、職員会議で全体の意見交換を行い、職員都合を優先してはいけない職場作りを目指している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居が長期化し、なじみの理髪店さんなどへのお出かけもままならなくなっている。費用負担をたくない意向の家族もいる。それでも、年4回のパーティ前には全員が綺麗になるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居が長期化したことと、男性利用者が増えたことによりキッチンでの共同作業はできなくなった。食事の楽しみは、煮炊きの匂いや音からも十分発信されており、職員が折々の行事食を工夫している。	おいしく食事をしてもらうことを第一に、利用者の好みや季節毎に旬の食材を使い、職員が心を込めて調理している。化学調味料は一切使わず、カレーライスのような一品料理は極力出さないようにしている。季節がよくなるとベランダや庭での昼食が楽しみになってくる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用の長期化に伴い、水分量や塩分量や糖質管理など留意点が増えている。個別に支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きやうがいを励行している。利用の長期化に伴い、口腔内の劣化が進んでいるが、認知症高齢者の歯科治療は困難を伴う。	認知症高齢者の歯科治療が困難な理由を付記します。①口腔内への治療を理解できないので歯科医や衛生士の手が口の中に入ることを拒む。②開口保持困難。③うがいなどの指示が理解できず治療継続できない。③治療用器具が口腔内に入ることを拒む。④抜歯・抜髄などの麻酔を伴う治療が理解できない。⑤治療後の仮封などを外し清潔保持困難。などなど、一般的な歯科治療は極めて困難です。また、義歯新装なども上記理由の他に、歯型が取れない、噛み合わせがつかめれないなどから、同じく困難です。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	おむつ使用は原則行っていないが、利用長期化に伴い、昼夜ともにおむつ使用という方はいる。ポータブルトイレの持込みは認めていない。職員は、排泄はトイレで行うのが当たり前という意識を持ち、意欲的に取り組んでいる。	おむつ利用者はおらず、職員は利用者個々人の生活のリズムや排泄パターンを熟知しており、トイレでの排泄を習慣づけるよう支援し自立効果を上げている。家族からパット交換が多いのではとの声もあるが、排泄の自立生活のためとして理解を頂いている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を把握し、食材にはきのこやヨーグルトを欠かさない、また、座らせっ放しにしないなどしている。基本的に毎日の排便状況に応じて下剤の量を決めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に、入浴は毎日、午後に行っている。促しと本人意向により実施しているが、徹底して入浴嫌いの方がいる。	毎日、午後3時から5時までの間、全員が交代で、家庭的雰囲気のある1人用の浴室でゆったりと入浴を楽しんでいる。隣接のデイサービスの機械浴槽を使用している利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居前調査票によって、入眠の状況や午睡の習慣を把握している。眠剤を使わず、自然入眠できるよう支援しているし、ご家族の了解、協力も得られている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬情報を保管し、薬は一人ひとり写真付の薬ケースに保管している。頓服薬などは、管理者に電話を入れ、服薬支援の前の複数確認を励行している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居前調査票によって、生活歴の把握に努めている。買い物や誕生会の準備、パーティの際のご発声など、様々な役割りを担っていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	ご自身の希望を言える方は、グループホームにはあまりおられない。自身の希望を的確に伝えられない方々がほとんどである。法人の庭がとても広く自然が一杯なので散策に連れ出したり、買い物のお手伝いをお願いしたりしている。	気候がよくなると、近隣の温泉施設(さくら温泉)や付属の庭園、グランド・ゴルフ場周辺の散歩が日課となる。北上展勝地へのお花見、焼石岳近辺へのドライブなど、季節毎に法人の他施設と合同で出掛けることで楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金をお金と認識できる方は、ほぼグループホーム適応外である。当会はお金を持たせないようお願いしている。それでも、『小遣いを渡しても職員に盗られてしまう』と家族から言われる。この質問の趣旨は分かりかねる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人から電話を掛けることも無く、ご家族が掛けてくることも無い方ばかりである。希望があれば支援する体制はある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	開放的なキッチンからは、煮炊きの音や匂いが漂ってくる。風呂場は古くはなつたが家庭的な大きさで、外光が入り、気持ち良く入浴できる。リビングにはイギリス製の美しいソファがあり、家具が居心地良くセッティングされている。	リビングやキッチンを取り囲むように居室が配置され、全体が見渡せるように工夫された間取りになっており、天井のあかり取りのスペースも大きく、明るくくつろぎやすい空間になっている。ソファやテーブルの他にコーナーに小さな畳の椅子が置かれ、利用者の動線にも配慮したリビングになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分専用の椅子があったり、物陰の置き畳で密やかに身を隠せる空間がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	男性入居者が多いせいか、お部屋づくりにまったく興味を持たないご家族が増えた。マスコミによる認知症介護の情報は巷にあふれかえっているが、認知症への理解とは程遠く、現場とご家族との乖離は埋まらない。	各居室のドアにはカラーの表札が掲げられているが、このカラーは利用者毎に介護記録ノートの表紙から日用品まで同じ色で統一して使用されており、利用者は色に対する識別感覚が高いという管理者の考えのもとに採用している。男性利用者が多いことか、個室は極めてシンプルで装飾品などは多くはないが、男性好みの部屋とも言える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	コスモスは、2000年建設の建物なので、認知症の方が生活する空間としては未完成部分がある。それでも、部屋間違いもせず、自分の好きな席でくつろいだり食事をする姿を見ると、入居者にとってコスモスは安全で安心できる環境であることを感じる。		